

湖西地元学セミナーに参加して

2004年7月24日～26日に開催された湖西地元学セミナーに、前半2日間参加させてもらった。当初の目的は「針江水ごよみ」の秋冬版製作のための取材だったが、「地元学」を推進する吉本哲郎さんと出会うという思わぬ収穫を得た。以下はその報告。

「地元学」とは

「地元学」とは、誤解を恐れずに言えば、「生きるための拠点を丸ごと知ろう」とすることだ。きっかけは、公害病として有名になってしまった水俣で、住民が行ってきた一つひとつの事柄を振り返ることから始まっている。

「水俣にはいろいろな人が調べに来てくれたけれど、住んでいる私たちは水俣についてくわしくならなかった。下手でもいいから、自分たちで調べて見よう」

という意識からスタートした。

その背景には、企業城下町として人々が暮らさざるを得なかった公害発生当時(1956年に認定)の状況と、それゆえに生じた住民同士の反目、差別の厳しい実態があった。

「公害がチッソの責任とわかると、生活に打撃を受ける住民がたくさんいました。伝染病ではないか、という偏見や差別も起きたし、保証金の問題もあった。それに誰でも自分の住んでいる町の名前が、公害病につけられたら嫌でしょう。水俣の名は生涯、公害病とともにみんなの脳裏に刻み込まれてしまったのです。その中からどのようにして地域再生を図るかが、水俣に住む住民にとって大変な重荷としてのしかかってきたのです」

と吉本さんは言う。

「地元学」へのもう一つのアプローチは、吉本さんが勉強会で知った「エリア・スタディーズ」という言葉に衝撃を受けたことによる。「エリア・スタディーズ」の「エリア」とは、アフリカ、中南米、東南アジアなど広い地域を指す。結局植民地型の経済支配に使われた学問が、今日のランドデザインの元になっていることに、吉本さんは愕然としたという。ここから「地元学」は、対象となる地域を「エリア」ではなく「コミュニティ」にし、外の人が調べるのではなく、地元に住む人たちが調べた情報を地元を集積し、地元で役立てようという活動に発展した。

「地元学」は同時発生的に、宮城県仙台市の結城登美雄さんからも提唱された。結城さんとの交流は、水俣の地元学発展のためにも、大いに役立ったという。

現在、吉本さんが講演をしたりしてネットワークを持った 80 カ所以上の地域で、地元学の取り組みが行われているという。

とにかく、やってみるんです

「地元学」には、大きく分けて2つのやり方がある。一つは博物学的に、数多く、広く情報を集める方法。もう一つは、テーマを決めて、狭く深く掘り下げる方法だ。どちらの方法を取るにしても、探すべきものは「あるもの探し」。「この村には何もない」とは決して言わず、プラスのあるものと、マイナスのあるものを探していく。探す目的は、自分たちが住んでいる地域を知ること。こんなに単純なことを、と思うかもしれないが、この単純なことができずに目が曇り、ものが見えないでいたために、積年の問題が一つも解決しないのが、現代日本の病巣の一番の原因だということに「地元学」は気づいてしまったのだ。

だから「地元学」で目指すのは、美しい村づくりではない。過疎の地域で停滞しがちな貨幣経済、比較的充実している自給自足経済、かつては強くつながっていた共働経済という3つの経済の調和を図り、地域を再生しようと試みている。

吉本さんは、2004年8月で丸2年を迎える頭石（かぐめいし）という地域の「生活博物館」構想の実態を見せてくれた。村を丸ごと「生活博物館」ととらえ、住民は「生活職人」、「生活学芸員」になる。村で作った食材でつくった食事でもてなしたり、土産物を販売したりするうちに住民の意識が見る見る変わっていくのがわかる。「何もない」はずの村が、実はとても豊かなことに住民自身が気づき、誇りを持っていく。

興味深いのは、こうした活動を通して、キーとなる家、人材が浮かび上がってくることである。誰かに指名され嫌々やるのではなく、自分から進んで行動するコアメンバーが必ず生まれてくるのである。外の風に当たって刺激を受け、つくる関係がつくられていく。こうした実例を目にすると、地元内に内在する力に希望が湧いてくるように思う。

大都市は地元になり得るか

しかし、と暗い気持ちになるのは、私が住む大都市は都会になり得るのだろうかということ。都市生活の基盤は、自給自足の原則から外れて、つくることを省略して代償としてお金を払うことで営まれている。大都市での「あるもの探し」は、果たして

成立するのだろうか。地域が丸ごと「生活博物館」になったり、住民が「生活学芸員」になったりすることができる都市は、いったいどれくらいあるのだろうか。

こうした視点で考えると、吉本さんがエリアでなくコミュニティと規定した意味もわかってこようというものだ。人間が人間らしく暮らすためには、一定の規模のコミュニティを維持することが必要で、今の大都市は存在自体に無理がある、という事実を突きつけられているように思えるのだ。

このことは、里川を探る場合においても同様。実は里川が機能していくためには、「地元」として成立する規模のコミュニティが不可欠なことがぼんやりと浮かんできた2日間であった。